恋姫†無双　神の悪戯

狂姫シアラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋姫†無双　神の悪戯

【Ｎコード】
Ｎ５８６３Ｎ

【作者名】
狂姫シアラ

【あらすじ】
悪戲大好きな神ロキの口車に乗せられ悪戲の代行者となった主人公。
志悪戲勲が恋姫の世界で第二の人生を送るというものです！
そんな彼に忍び寄る、悪魔の気配……。
続きは本作で乞うご期待！していただけるとありがたいです！！！
もしかしたらＲ１５ではないかも

悪戯の始まり。（前書き）

え～っと新参者ですが、見ていただけたらありがたいです。
更新スペースは遅いですがその分質のいいものを届けたいと思っていますのでよろしくお願いします。

悪戯の始まり。

「あッ！子供が危ない！！！」

轢かれそうになっている子供を見て思ったのがついさっき。そして代わりに命を落としたのも今さっき。そして怪しげな風陰気を漂わせて空中に座ってる神と名乗る人の目の前にいるのはたったいま。

「それで、なぜ俺はここに？？」「何、暇つぶしだ。」「暇つぶしって……。」

「我はロキ。北欧の神だ。」「ああ、悪戯大好きロキ様ですか。」

「そうだ、そのロキだ。さて、最近神の国での風当たりが強くてな。友人の仕事の手伝いをするために汝を呼んだのだ。」

「その仕事は本来貴方がするべきでは？」「残念ながら、神は直接人の住む世界に手を下してはならんのだ。例外として裁きは別だが……。」

「ということは、人がいる世界でお手伝いですか？」「うむ、たまたまちょうど汝が死ぬのを見つけたのでちょうどいいと思ったのだ。」

「三国志の時代の世界になるな。汝は知っておるか？恋姫無双とかいうゲームを。」

「ええ、まぁ、一応。小説でよく見かけていましたから。」

たしか、主人公本郷一刀が三国志の世界に飛ばされて、しかも有

名な武将は皆女性という内容だったな。

「三国志の武将って皆強いんじゃなかったっけ？生きていけるんですか……。」

「まぁ、案ずるな。我は腐っても神だ。お前の体にちょっと細工するくらい造作もない。」

「細工といいますと？」「身体強化だ。お前の体は、通常の人間の十倍近くの身体能力を授ける。あと、四次元ポケット的なものも使えるようにしておいてやろう。その中に武器も入れておく。使い方はあっちについてから教えてやろう。」

さらさらと紙に神が何かを書いている。しゃれじゃないよ？

「よし、終わったぞ。それではよい第二の人生を……。」

カチッと音がすると床が消えて、飲み込まれていった。

「ぬぅあああああああああああ！！！！」

「あああああああああああ！！！っとっと。」

気がついたら地面の上。浮遊感が急になくなったことで足場をうまくつかめなくよろけたが問題ないようだ。

「ふぇ、何とか着地できたみたいだ。……さてとここはどこだ？」

辺りには木々が立っており、自らの位置を特定する方法がなかった……。

悪戯の始まり。（後書き）

ちょっとこれ以上続けるとプロローグにならない気がするのでここえいったん切らせてもらいます。今日はもう一個だけ投稿させていただきます。

悪戯でチートな能力。（前書き）

本日二個目の投稿です。それではどうぞ。

悪戯でチートな能力。

「どうすっかな～。」

辺りには木が立っているだけ。無駄に動いて体力の浪費をするのもばかばかしい。というのも実家はサバイバルの達人と呼ばれる父が住んでいて、どこにいるか分からなくなったらとりあえず寝て何か考えろというのが父の教えだ。なので、とりあえず寝転んでいる。

「あ、ロキが言ってたあれなら何とかなるかも。」

と言った矢先にひらひらと舞い落ちる紙。ロキが書いたであろうものだ。

「ん～っと何々。この紙が来ていると言うことは汝がそっちに無事ついた証だな、か。え～っとほかには……。能力についての説明。」

念じればなんとなく出来る……。なにこれ？とにかくやってみるか。

頭に青いネコもどきのタヌキを思い浮かべながらポケットにてを突っ込んでみる。

「なんか入ってるな。よいしょっと、でかいな。」

出てきたのは上下に鎌の様なものがついている武器。説明書もついてる。

「え～っとなになに。死神の中でも最も優秀なものしか使えない鎌。このまえたまたま手に入れた。後、これは人を殺すためにある鎌じゃない。か。」

絶対、故意でとったな。いやだよ？死神に鎌を返せーって言われて追いかけられるなんて。

P，S．

取り返しに来るなんて事はないから安心しろ。とられたなんて思われればそいつは一気に信用を失うからな。

ならいっか。

「とりあえず、背中に……。大きいから無理か。」

とたんに紙面が変わる。どうやら二つに分けられるらしい。

「……これでよし。」

探ってみると、ほかにもいろいろな武器が出てきた。特に気になったのが変幻自在の武器。

フェンリルとヨルムンガンドの魂を合体させて作ったらしい。狼の力強さと、蛇のしなやかさがこれを生んだらしい。一つでどんな武器にもなるらしい。イメージすればおｋと書いてあった。

「当面の食料や金もあるな。とりあえずは生きていけそうだな。でも……。」

ここってどこ？

「え～っと確かこの辺のはず……。」「……？誰かいるの？」

出てきたのは俺のピンク色の髪より薄い色髪の少女。いや、幼女？

「貴方は誰？天の御使い？」「天の御使い？」

ややおびえた様子でこちらを伺っている。無理もない。前の世界では狂暴な犬神を抑えるための人柱
その影響か体のあちこちに刺青のような線や刻印が出来ていたり、目が蒼一色に染まってしまっている。人外の存在と言っても過言ではない。

ま、別に気にしていないけど……。周りの人間はおびえて近づこうともしなかったから。別に迫害を受けたわけではなかった。両親は優しくしてくれたし。

「天の御使いかどうか知らないけど、俺の名前は志悪戯勲（しあくぎくん）。君は誰？」

「シャオは孫尚香。」「ん？何でシャオなんだ？」

今、自分の名前をいったけど、全く違うな……。

「シャオの真名は小蓮だからシャオ！」「真名？」「真名を知らないの？天の国では真名はないの？」

「俺が住んでいたところには真名と言うものはなかったね～。」

言うや否や目をきらきらさせて急接近！！！

「本当に天の御使い様なのね！？」「ま、まぁ言ってみればそんなものになるかもしれない……。」

「やった！シャオが天の御使い様を見つけた！！」

手を引かれて森を抜けていく、やがて完全に抜けて遠くに町が見える。

「行くわよ！」「ど、どこに？」「シャオの町！！」

聞き間違いかな？今、自分の町って言ってたよね？

「おおぅ、門兵が敬礼してる。」「当然よ！ここは私の町なんだから！」

そうか、孫尚香といえば三国志で孫堅の娘で小覇王、孫策の妹。だったら不思議ではないか……。
だが、公務などはどうしているのだろうか？

「あ、シャオちゃん！どこに行ってたんですか！？って、そちらの方は？」

水色に近い緑色、翠色のような色をした髪をした女性。そして、驚くべきはその胸。でも、母さんほどではないかな？

「この人は天の御使いよ！」「あら、そういえば今日でしたね占いの日は～。」

「占い？？？」「管賂さんていう方が今日悪を退ける悪戯が現れるって言ってたんです。」

結構、あたるんですよ！と熱心なそちらの方。

「あ、申し訳ありません。私の名前は陸遜です。真名は穏です！」

「俺は志悪戯勲です。真名とかは持ってないので好きなように呼んでください。」

ちなみにいきなり真名を教えてもいいのか？とたずねた所、天の御使い様ならいいんですよ。と満面の笑みで返された。

「あー！穏ずるい！シャオまだ教えてないのに！！」

頬を膨らませて起こる姿には和み以外のものは感じることが出来なかった。

「じゃ、教えてくれるかな？」

子供をあやすような態度に怒ってしまったのか、ポカポカとたたいてくる。やがて、気が済んだのか、疲れたのか、落ち着いてから……

「シャオは小蓮！でもシャオって呼んでもいいよ！」

「わかった、シャオ。これでいいかな？」

元気よくうなずく彼女の頭に手を載せてなでる。口では子供ではないと言っているが、こういうところは子供っぽくって可愛いと素直に思った。

「ところで、穏さん。」「もぅ、穏でいいですよ。あと、敬語もやめてください。」

「分かった。質問をいいかな、どうして孫家の娘がここに？」

「実はですね～。」

ほぅほぅ、へ～　（＾Д＾　。）（　－ｖ－。　）（　＾Д＾　。）（　－ｖ－　。）ウンウン

「袁術の策略で孫呉は力を分散されていると言うことですか。」

「全く！あの小娘のせいでお姉ちゃん達にあえないわ！！」

君も十分小娘だよ？ってツッコミは置いといて……。

「それでは孫呉の復興もままなりませんね～。」「そうなんですよ～。」

場所変わって、事務所的な場所。

二人はのんび～りとお茶（ロキのいった四次元ポケットっぽいものに入っていた紅茶。）をすする。

「あ！おいしいですね、このお茶。なんていうんですか？」「紅茶と言うんですよ。遥か西のほうでしか手に入らない貴重～な物ですよ。」

「よかったんですか～？」「ええ、いくらでもありますし。」

「というか、口調が敬語に戻っていませんか？」「すみません。いくらでもあるから好きなだけ飲んでかまわないよ。」

ＡＲＥ？変わったか？ん～敬語で生きてきたような物だから、難しいですね。

「ん～、何とかして合流したいんですが……。」「出来ると思う。」「へ？どうやって？？」

「そう、だな。あまり詳しいことはいえないけど、近々大きな戦が起こる気がする。」

「で、どうするんですか？」「そのときに、もちろん孫呉にも朝

廷から要請が来る、そして」

「分かりました！戦力に不安があるので、家臣たちを呼び戻していいですか？！と言うんですね。」

「だけど、これには問題がある。そんな要請を聞いてくれるとは思えない。いくら馬鹿でも分かるだろう。」

「大丈夫です！袁術さんはほんとうに幼くて、本当におばかちゃんだから大丈夫です！」

だったら、なぜ、戦力を分けると言う名案を思いついたのか……。それに関してはそばで中々優秀な人が使えているらしいが、袁術がよしといえばよしらしい。

「では！早速、文を送ってきます！！」ドタドタドタ……

静かになったな……。ズズッ……。

ドタドタドタ！！

「大変です！」「ゴホ！どうかした？」

「賊が攻めてきているんです！！！！」

穏に付き添い、軍議の場へ。俺が現れたとき、ほかの兵士たちは一瞬だれかと痛い視線を受けたけど、シャオが天の御使いといっただけで皆さん頭を下げてきたのでびっくりだ。

「ところで、俺はこうして普通に軍議に出てるけど……。いいのかな？？？」

確かに将でもない人が軍議に立ち会うと言うのはおかしい。だが、上目遣い&うる目で協力をせがまれたらことわれません。

「じゃ、俺は客将って言うことで。よろしく。」「では、早速軍議のほうを……。」

「ん～どうすればいいんでしょう……。」「そうだね。これだと、戦闘中に指揮をして臨機応変に戦うしかない。」

平凡な土地。特に起伏や森があるわけではない土地では奇襲などの作戦を練ることが出来ない。
野戦で臨機応変に戦うしかない。

「私は前線で指揮を取れるような人間ではないし……。」

「ジーッ」「ジーッ」

やめろ！そんな目で俺を見るな！！！！！しかもほかの兵士たちまで！ノリがよすぎない？？

「分かったから、その視線をやめてくれ。」

「さっすが御使い様！ありがとうございます！」

ところどころからさすが御使い様とか頼りになりますとか、絶対、まけないな。とかプレッシャーかかるんですけど……。

「さて、準備しますかね？」

兵士たちは勢いよく声を挙げて戦闘準備に取り掛かった。

「う～ん、どうしようかな～？？？」

兵法とかしらないし……。陣形とかなに？本でもあれば覚えられるのに……。と思った矢先に……。

ドスッ！「痛！」

空から一冊の本が。これはもしや、ロキ？？？

『久しいな。元気でやっているか。今回はあの能力の説明だ。あれはイメージしながら手を突っ込むと、それに適した最良の物を選んでくれる。この本はおまけだ。ただし、実在するもののみだ。』

「悪戯の神といってもやはり根は神か……。いい神だったんだね。」

ちなみにこの青年には天才的な能力瞬間完全記憶能力がある。見た物を絶対に忘れない！同時に、何かを忘れることも出来る。

パラパラパラパラ……。よし、覚えた。

「準備が整ったそうですよ～？」「分かった。それじゃ行きますか。」

集まっている兵士の数は2千。偵察からの報告では相手は二千五百。楽勝。

「え？なに？俺が演説するの？？？……。」

「え～、どうも天のお使いと呼ばれている志悪戯勲です！今回の戦いはっきり言って……。

兵士全員がつばを飲み込むような雰囲気になる。

負ける要素がありません！差はたったの五百！イェス・ウィ・キャン！！」

大統領の名台詞を決めていざ出陣！！（この後、呉ではしばしばこの言葉が使われたらしい。）

遠くから押し寄せる大群？それぞれが黄色い布を付けている。あれが黄巾党。思ったより戦は近いようだ。

「まずは鶴翼の陣！！」

俺を真ん中において左右から突撃を掛けて囲み内側に残った敵を俺が無双して殺していく。

ザシュ！「グワッ！」「バ、ババ、バケモノ！！」「どうやって振り回してるんだ！！！！！」

次々と倒れる敵。それをみて士気をあげる兵士たち。

だが、この戦から彼の体に変化をもたらした。

「体があつい……。血が熱い……。」（私にも戦わせろ！人間の血をよこせ！！）

「な、こ、これは……。」犬神の力が強まっている？馬鹿な、そんなこと……。

「だが、押さえつけられないほどではない。」

変幻自在の武器ルーク（狼のウルフのルと蛇のスネークのークでルーク）を巨大な剣にして敵をなぎ払う。なぜか知らないけど、剣一本分の軽さで振れる。

「よし、このままいけばいける。鋒矢の陣でそのまま敵を殲滅！！」

そして戦は御使いの力と軍配により圧倒的な勝利を収めた。これは天の御使いの一人の存在を広く知らしめる物となった。

悪戯でチートな能力。（後書き）

乙です。主に作者が……。
ちょっと中途半端ですが、次回はこれの後の話を書いて二話ぐらいはさんで決戦へと持っていこうと思っています。
※少々、シャオのキャラがズレたので修正しました。そのほか、やられ役のセリフなど。

平凡な日々。いいえ、騒がしいです。前半（前書き）

さてさて、あの戦の後のお話です。
皆様が読みやすいよう、楽しめるよう工夫していきますのでよろしくお願いします。

平凡な日々。いいえ、騒がしいです。前半

「ふはぁ！……あーびっくりした。筋肉だるまに追いかけられる夢を見た……。」

「大丈夫ですか～？随分うなされていましたよ？」「おはよう、穏。」

「おはようっていう時間帯でもありませんよ～？もうお昼です。」

何！？そんなに眠かったのか？？とにかくもう起きないと。

「ところで本当に大丈夫なんですか～？」「ん？大丈夫。……だと思うよ。」

あんな夢一生トラウマになるけどね……。

「あ、そういえばシャオちゃんから呼ばれていますよ～？」「ありがとう。じゃ、また。」

にしても呼び出しか～。昨日の話しかな？なにかあるのかな？

「お呼びに参上したしました！」「おそ～い」「ごめんごめん。」

ナデナデ……。気持ちよさそうに頬緩めちゃってる。燃えっていうんだっけ？

やがて子ども扱いされてることに気がつくと手を払いのけてかわいらしく睨みつけてきた。
払いのけてから寂しそうな顔は勘弁して。

「女の子を待たせるなんて論外よ！」ビシッ！！（↑某逆転ゲームでおなじみの指差し！）

「はいはい、それでどうしたの？」「息抜きで町に出かけようと思うの！」

「はいはい、仕事は？」「私に出来るはずがないわ！」

「はいはい、ちゃんとしてからにしようね。」「ぶー、いやだ～。出かけるの！」

そういわれても、後々苦しいだけだぞ？俺も手伝うからなどの説得により先に仕事を済ませることにした。したんだけど……。

「戯勲～、これやって～。」「はいはい」「これも～。」「はいはい」「あとこｒ……。」

「ちょっと待てぃ！！」「へ？」「へ？じゃないだろう……。」

二つの机に置かれている書蘭の量を見てみましょう！はい！俺のほうが二倍ありますね！！

「いくらなんでも自分でやらなさすぎじゃないかな？」「だって～、こういうのつまんないし。」

「つまらなかろうが楽しかろうがやるべき事はやるべきだ。ほら、これとこれとこれをシャオがやらないとダメじゃないか。せめて、自分宛の仕事をやって。」

「じゃあ、そのほかの仕事をやってくれる？」「え？それとこれとは……。」「お願い……。」

グ！まさに孫氏の罠。上目遣いにうるめに顔の前で手を合わせるなんて高等テクニックが使えるとは……。

「わ、わかったよ。やるよ。」「わ～い、戯勲ありがと～！」

結局、元の三倍の量の仕事を片付けることとなりました。

平凡な日々。いいえ、騒がしいです。前半（後書き）

はい、まずは前半と言うことで投稿させていただきます。

悪い点、いい点、はたまた両方。でもいいので感想を書いてくれるとありがたいです。

これからもなにとぞよろしくお願いします。

平凡な日々。いいえ、騒がしいです。後半（前書き）

わふー！やっとの更新で申し訳ないです。後半です。どうぞ。

平凡な日々。いいえ、騒がしいです。後半

「ふ、ふふふ。つ、疲れた。」「お疲れ～！」

こんなところで忍術を使うとは……。

三倍の量を片付けることになった俺は、一人じゃさすが二時間がかかりすぎると言うことで
瞬妓・風分身を使った。え？忍術使えるのかって？まぁ、その話は後ほど……。

「誰に言ってるんだ。俺……。」「なにをグズグズしてるの？早く街にいくわよ～！」

えいえいおーとも言わんばかりの元気にあふれる幼女……百歩譲って少女……。

「や～め～て～。」ズルズルズルズルズル……。

「着いた！」「なんともまぁ、にぎやかな町ですね。これも治める人がいいからに違いありません。」←棒読み

「なんか、納得いかない言われ方……。」「気のせい気のせい！」

「じゃあ、まずは……」「腹ごしらえですね～。」

なんせ朝飯も食わず、いきなり仕事させられましたからね～。ペッコペッコです。

とりあえず、近くの店に……。

ガシャアアン！！！

「この店はやめてほかに……。」「行くわよ！！」「さいですか……。」

「おいおい！なんだこの店は！こんなまずいもん食わせやがって！」

とか言ってしっかりと空にしたお皿を投げつけるチンピラA

「す、すみません。御代は結構ですので……。」「そんなもんで腹の虫が収まるか！」

「キャッ！」「へへ、この娘を貰ってくぜ？」「や、やめてください！」

「その娘は私のたった一人の子供なんです！！」「うるせぇ！！！」

派手に蹴っ飛ばされて足元まで飛んでくる店主……。

「大丈夫ですか？」「お願いします……。娘を……。」

肩に手を当て、しっかりとうなずくと気の緩みから気を失った。

「さてさて、虫を掃除しますか？」「やっちゃいなさい！！」

「了解。」「あん？なんだてめぇ？」「命令なんでな。すまないけど……

殺気をこめて、冷たく暗く低く……

死んでくれる？」

「「「ヒッ！！！！！」」」

尋常じゃない量の殺気を感じ取ったチンピラ共が逃げようとする。

「ダメだね。全然！ダメだ！！！！」舜妓・気がついたら命がない！？↑じぃじが名前付けた。

「ギャ！」「グァ！！」「ひ、ひぃぃぃ！！！」

一人ひとり、丁寧に首に手刀を当たる。気絶した男たちを外に放り投げて、兵を呼んだ。

「さてさて、言い訳は牢屋でして貰おうかな？」「く、くそぉ！！！」

兵士たちにチンピラを渡すと、先ほどの店主が目を覚ましてこちらに近寄ってきた。

「先ほどはどうもありがとうございました。」「いえいえ、当然のことをしたまでです。」

「あ、あの……。」

さっきさらわれそうになった少女。

「本当にありがとうございました！！」ゴン「いった〜〜！」

勢いよすぎで頭打ってる……。

「だ、大丈夫？」「はい、大丈夫です……。」

額をさすりながら目じりに涙を浮かべている……。

「ぎくん～！おなか減った～！」「おっと、そういえば。お願いできますか？」

「ハイ！少々お待ちください。」

十分後……

「おまちどうさまで～す！！」

中華料理がずらりと並ぶ。和食のほうが好きだけど、この中華は和食よりおいしいな……。

「うわ～、すごくおいしいです……。誰が作ったんですか？」「わ、私です！」

「へ～、すごいなぁ……。将来きっといいお嫁さんになりますね！」

「え！？あ、あの、私、まだ、結婚とか、その……。」

「アハハ、でもおいしいですよ？」「プハー、シャオもう食べられない。」

「本当においしかった。また、来ます。御代はここにおいていきます。」

「そんな！助けていただいたのに御代なんて……。」「いえいえ、代わりにおいしいものをいただいたので……。それでは……。」

御代を机においてその場をシャオと共に立ち去った。

「さて、ちょっと色々あったけど、飯も食べたし……。」「ぎくん～！こっちこっち～！」

忙しい……。楽しいからいいか……。

「ぎくん！この首飾り可愛い！」「ほんとだね～。」

銀色を基本としたシンプルな首飾り。

「お目が高いですね、これは天の御使いが現れたときに空から降ってきたらしいです。」

「え？ホントですか？」「ハイ、悪戯を成す手助けをしてくれるとか……。」

「買います！いくらですか！！！」「え～っと、このくらいで！」

「た、高いわ……。」「買います！！」「ど、どうぞ！」

おつりが来るくらいのお金を渡すと店主はほやほや顔で見送ってくれた。

「お客さ～ん！まってください～！！！」

さっき分かれたばかりの店主が走ってきた。

「はい？」「さっき思い出したんですが、この紙も一緒に落ちてきたんです。ですが……。」

「ですが？」「全く読めないんですよ。いや、字であるかどうかさえ……。」

「とりあえず、貰います。」「では、私はこれで……。」

読めない？この時代の字とは違うのだから……。

「きっと俺の時代の字なんだろうなぁ……。」ペラッ！

『ちょっとしたミスで違うところに落としてしまったことを許してくれ。さて、犬神の力が抑えられないことで悩んでいるようだな。無理もない、正式な儀式はまだ終わっておらず、刻印もばらばら。かろうじて体内にとどめているところだろう。儀式の準備が出来るまで、その首飾りを付けろ。
力ずくだが、抑えられるし、腕ぐらいなら具現化できるようになる。
儀式の準備はこちらでやる。
それまで待ってろ。』

「どうして、こんなにも親切なんだろう……？」「ん～、なんてかいてあるか分からない～。」

それはそうだろう……。

「とりあえず、付けてみるか……。」

特に変化ないな……。

「ぎくん、似合ってるよ！」「ありがとう。」ナデナデ……

「よし、そろそろ日も暮れてきたね。帰ろうか……。」

肩車をして帰路についた……。

「た、たいへんですよ～！戯勲さん！シャオちゃん！！」

こちらを見つけた穏が走ってきた。

「どうかしましたか？」「ふ、文が……。雪蓮様から文が届きました！」

「お姉ちゃんから！？」「はい！すぐに合流するようにと……。」

思ったよりも早かった。いや、早すぎる。一ヶ月ほどはかかると思っていたのに……。

「ありえない……。なぜ、もうも早く……。」

黄巾党の兵力が集まるにはもう少しかかるはずなのに……。

「どうかしましたか？」「いえ、なんでも……。」

「さてさて、少し疲れたんで、その話はまた明日にしましょう……。」

いや、本当になんだか……。眠い……。

バタン！！！！！！

いいにおいと、暖かい感触を最後に感じて倒れた……。

「久しいのぉ？小僧！？」「い、犬神！！？母上が死んで俺の身に宿して以来だね……。」

「ここは……？」

真っ白な空間に犬神が銀の鎖で縛られている。

「全く。あの娘が死んでからと言うもの完全な儀式を終えられず。意味の分からん鎖に縛られている。勘弁してほしいものじゃ。」

「そうか、すまない。しばらくは我慢してくれ。」「似ておるな……。お前の母に。」

「お前の母親もなぜか、恐怖しなかった。」「それはそうです。犬神の本当の怖いほうは……。」

空間が半分黒くなる。そして、おくには……。

「あちらのほうですから……。」「見えるのか？」「ええ、もちろん。」

苦しい。彼を見てるととても悲しくなる。それは犬神に体を喰われて狂気を身にまとい、ただひたすらに暴れることしか出来ない存

在。

「悲しい。彼を見ていると。非常に悲しい。苦しい。寒い。怖い。負の感情が流れ込んでくる。反対に貴方は暖かい。」

「そう、あやつが負だとしたら私は正。私たちが均衡を保つことでお前の精神と肉体は保たれる。」

ゆっくりと近づいて、彼に触れる。

自然と涙が流れる。暴れていた彼は落ち着いてその場にひざまずいた。

「!!!?なんと!そやつを手なずけるか?ククク!面白い。」

「彼は昔の俺。俺の大きな負の感情から成り立っている。」「そうか、確かお前は……。」

「さて!なんで俺はここに来ることになったのかな?」

「知らぬ。この鎖に仕掛けがあるらしい。作ったものに聞け。」

「そうか……。」

悪戯って奴ですか？ロキさん。

「よし、じゃあ俺は行くよ。」「うむ、さっさとこのうっとうしい鎖をはずしてくれ。」

「はぅ！？……夢か……。」

昔の記憶なんて思い出したくないのに……。余計なことを……。

「ヘクチッ！」くしゃみ？

「スースー……」「穏……？」

そういえば……。倒れたんだっけ。何も掛けないで眠っているせいかくしゃみをしてしまったのか。

スクラッド（四次元ポケットっぽいもの。ロシア語で倉庫と言う意味。）からマントを出すと彼女の上に掛けた。にしても、この態勢は……。

俺の胸にもたれかかりながら眠る穏がいて、当然顔も近い……。時々息が頬に当たる……。

自分でも分かる。顔が赤くなっている。本人が起きていないのがせめてもの救いか……。

儀式か……。どうやってやるんだろうか……。

平凡な日々。いいえ、騒がしいです。後半（後書き）

ん～？ちょっと話の流れが可笑しいと思うのは私だけでしょうか……？

申し訳ありません！！！とりあえず誤っておきます。

オリキャラ設定？（前書き）

え～っとそろそろ主人公の具体的なステータスについて語りたいと思います。

オリキャラ設定？

志悪　戯訓　（しあく　ぎくん）

代々犬神を身に宿し、従える家に生まれた長男。兄弟はいない。母親は既に他界。

その際に犬神を母から受け継いだ。父は風魔党の党首。祖父は先代党首。

忍術なら完璧。だけど、武術は槍以外は全て強化して貰った身体能力頼み。

ちなみに常人の十倍。なのでこの世界最強の呂布の約二倍。

ロキから貰った能力、武器

強化……常人の十倍の身体能力。

スクラッド……頭の中でどういったものが欲しいのか、イメージしながら手を突っ込むとその目的に応じた最良のものを選んでくれる。ロシア語で倉庫と言う意味。だが、神の国でも存在しないもの

はあるので、存在しないものは出せない（死者をよみがえらせる薬など……。）

ルーク……ウルフのルとスネークのークでルーク。変幻自在の武器。どんな武器にもなる。
だけど、ルークという一つのものに定められた能力を変化させることはできないので集中的に使いたいものがあればそれをこの世界で作ったほうがよい。神々を苦しめたフェンリルとヨルムンガンドの魂が
宿る。

グレイプニル……かつてラグナロクまでフェンリルを天に縛り付けていた魔法の紐。今は戯勲が付けている首飾り。抑えきれない犬神の力を抑えるために与えられた。

最高位死神の鎌……死神の鎌自体に名前はなく、階級によって定められた鎌が与えられる。この鎌は最も位の高い死神が持つ鎌。人を殺すための武器ではないと言うが……？

元々本人が持つ力（犬神）について

本来、犬神は一つだったのだが彼のうちにある強力な負の感情が犬神の力を一部奪い取った。負の感情は精神を乗っ取ることもできたが、それはもう一方の犬神の巧みな力により均衡を保っている。

グレイプニルの力により、腕だけならば犬神を具現化できる。

正式な儀式を行えば、犬神の力を完全に操ることが出来る。

オリキャラ設定？（後書き）

以上、設定です。オリキャラを出していきたいと思っていますが、何分恋姫のキャラ数が多いものですから……。個性あるキャラを作るのが難しいんです。

では、次回は孫呉集結です。

※すっかり鎌のことを忘れていたので追加させていただきました。

孫呉集結（前書き）

主人公の設定をはさんでの五話目ですね。
ついに、孫呉の面々とご対面ってわけですね。
少々、至らないところもありますが、よろしくお願いいたします。

孫呉集結

数日を経て、やっとついた建業……。

「ここが、建業ですか？」「ええ、そうですよ～。」

と朗らかに答える穏。ちなみにあのマントは女神の守護の魔法陣が入っていた。本人がひどく気に入ってるため、守護という面もあり一石二鳥であげた。

「なんといか、さすがに大きいですね。」「そういえば、戯勲さん。口調が敬語に……。」

「本当ですね。どうも慣れなくて……。」「そうなんですか～。仕方ないですね～。」

「ぶ～、最近ぎくんが冷たい～！」

え？俺のせい？ついさっきまですねていたのはそっちじゃないか……。

「穏にはなにか上げてもシャオには何もくれないんだ！！！」

といういきさつがあってこの数日間、話しかけてもまともに答えてくれなかった。

「ごめんごめん、時間が出来たら外に出れるように頼むから。」
「ホントに！？約束だよ！？？」

割り切り早いなぁ……。まぁ、いっか。後で頼んでおこう……。

城に案内されてたどり着いた王の間？見たいなところ。そこには各地に散らばった呉の家臣たちがいた。中でも、孫権、甘寧、呂蒙、周泰が独特の雰囲気と言うか何というかそういったものを感じる。

奥には周瑜、孫策、黄蓋の三人が杯を手にしている。

「居心地悪いんですけど……。」「まぁ～、見慣れていない方がここにいるというのが気になるんでしょう～。」

突き刺さる目の数……。痛いです……。

「おねぇちゃ～ん！」

久々の再会に、姉の下へと掛けて行くシャオ。それを追うように足を進める。

「あら、小蓮……と貴殿は？」「志悪戯勲と申します。」

シャオと俺に対する口調が変わるのは仕方ないと言うことなのでしょうか？

「では、貴殿が噂の……？」「天の御使いってことになっていますね。」

ザワっと周りが静かに騒ぎ始める。

「確かに、うわさのに聞いたとおりの目をしておるな。」

孫堅と孫策を支えた将、黄蓋将軍が話しかけてきた。

「始めまして、志悪戯勲と申します。貴方は黄蓋様ですね？」

「うむ、ワシが黄蓋じゃ。主が噂の御使いとはな……。少々、想像と違ったわい。いい意味でな。」

騒ぎを聞きつけて色々な人が集まり、互いに自己紹介を交わした頃、孫策様が話し始めた。

「皆、よく集まってくれたわね。朝廷から正式に世を騒がす黄巾党を征伐するようにと、命が下ったわ。そして、戦力の強化と称して皆を集めたの。ここが、私たちの孫呉の出発地よ。」

元々用意されていた紙を呼んでいるような様子があるわけでもなく、淡々と口から言葉が出ていた。
こういったものが、王にとって必要なのだろう。覚悟を語ること……。思いを素直に話すこと。そうすることで民衆の心をつかむのだ……。

「そして、今回この案を考えてくれたのが……。そこにいる天の御使い、志悪戯勲よ。」

ふぉ、ここで俺を出してくるなんて……。うわ、緊張する。

「彼を正式に呉に加えることを決めたわ！！」

え？ちょ、ちょ、ええ？！聞いていないよ……。本人の知らないところでそんなことが決まっていたなんて……。

「もちろん、彼に拒否権はないわ！！！」

あ、話し合っていたわけではなくて……。独断による決定ですか……。

周りは天の御使いが加われば、心強い～などの理由によりもうすっかりその気らしい……。

この瞬間完全に俺の道は決まった……。

まぁ、いっか。行く当てもないし……。

集まりは幕を閉じて、早速、出かける許可を求めに孫策様のところへ向かった。

「少しよろしいでしょうか？」「ええ、いいわよ。」

杯をまだ持ったままの孫策様。まだまだ飲むご様子です。

「少し、外へ出てもよろしいでしょうか？」「どうして？」

そこは聞かれたくはなかったところなんだけど……。

「別にサボりに行くわけではないんですが、シャオと約束してしまいまして……。」

「そう、あの子が……。いいわよ、あの子をお願いね。」「御衣。」

ってことで……。

「シャオ、許可を取ってきたよ。」「ホント！」「ああ、約束だからね。」「ヤッター！！！」

お姫様のご機嫌どりも簡単ではありませんね……。楽しいですが……。

そんな彼とは裏腹に、影で動き出す人物がいた……。

孫策ｓｉｄｅ

へ～、あの子が真名を許す相手か……。しかも、これから仲良くお出かけね～～。

「これは、姉としてみなければいけないわね……」ニヤリ

一旦ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

戯勲ｓｉｄｅ

ゾクッ「ううッ」「どうかしたの～？」「いや、悪寒が……。」

まぁ、気のせいだろう……。そういうことにしておこう。

「ん～、シャオが治めていた町よりかはやっぱり大きいな。」

これだけでかいと、町よりも街と表示したほうがいいな……。

「こっちこっち～～。」「分かった分かった……。」

誰かに見られている気がする……。いや、今はシャオのほうに集中するか……。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

孫策ｓｉｄｅ再開

ふっふっふ～、冥琳には悪いけど、姉としてこれはやっぱりね……。

あら？小物屋に入っていったわね……。贈り物をするつもりね……。あら、いい髪飾り……。じゃなくて、今はあの子だったわ……。でも、本当にいい髪飾り……。

「ハー……。そんな所でみていないで、出てきたらどうですか？」
「え？」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

戯勲ｓｉｄｅ

皆さん。さっきの視線やっぱり気のせいじゃなかったみたいです。孫策様が後ろから付けてきています。

「ぎくん！聞いてるの！！？」「ふぇ！？うん、聞いてる。あ、

この首飾りなんてどうかな？」

「うん！シャオこれがいい！！」「そう？じゃ、これにしよっか……。にしても……。」

金を基本として、真ん中に大きな宝石が埋め込まれている。それを手にとってから……

「ハー……。そんな所でみていないで、出てきたらどうですか？」「え？」

「……分かってたの？」「ええ、こういうものには非常に敏感でして。」

「それで？」「それで……って？」「お仕事はいかがなされたので？」「……。」

血は争えませんね……。妹がこうだと姉もこうだということでしょうか……。

「これですか？」「え？」「いえ、随分熱心に見ていたものなので……。」

赤色に金の模様が刻まれた髪飾り。

「そ、そうよ。よく分かったわね。」「ええ。……すみません、これもいいですか？」

店主にもう一つの品を渡す。会計はもちろん俺。

「い、いいのかし、ら？」「ええ、かまいませんよ。」

お金なんて腐るほどあるからね……。使わないともったいない。

「なら、もらうわ。ありがとう。私の真名は雪蓮。貴方に授けるわ。」

「いいんですか？」「いいのよ。ついでにその堅苦しいしゃべり方を何とかして欲しいわね？」

「すみません……。心が足りないので、敬語以外はなんとも……。」

最後の部分は誰にも聞き取られることはなかった。

夕方、帰るとなぜか巻き添えを食らった……。ちなみに周瑜さんの真名も教えてもらった。

夜……

一人、お酒を手に月見酒。今宵は満月。血が騒ぐ。

「お前が戯勲とやらか？」「……？ロキさんですか？」「違う違う。あいつと一緒にするな。」

雰囲気だけで言ってみたので、はずれでした。

「私はウァサゴ。お前に助言を与えるように使わされたのだ。」
「ウァサゴ？」

「二十六の軍団を治める偉大な王子だ。ソロモン七十二柱の一人だ。」

「悪魔……？」「そうなるな……。私の力は過去、現在、未来を見通す力を持っている。」

「お前はこれから、人外の者と戦うことになる。勝つか負けるかはわからん。……だが、最初のものとの戦いによって真に秀でたものを得る。とでておる。」

「誰の命令でここに？」「それはいえない。契約というものがある。」

「戯勲殿？」「これは、黄蓋殿。」横を見ると、既にウァサゴの姿がなかった。

「月見酒ですかな？」「ええ、ご一緒にどうですか？」

「誰かと話をされていたようじゃが……。」「ええ、ちょっとした友人と……。」

全く知らない相手だけどね！！！！

「さぁ、どうぞ。」「かたじけない。」

とくとくと杯に注がれるお酒。

グビ！

「いい飲みっぷりですね。」「貴殿こそ。」

翌日、調子に乗って飲みすぎて冥琳に怒られた。

？？？？達ｓｉｄｅ

「どうだった？あいつを見て。」「どうもこうも、父親そっくり。読めない奴ですよ。でも……。」

「父親と違って、好きになれそうですね。」「ハハハ！！そうか！」

「……だが、我らが天に昇るにはあいつの持つ物が必要だ。」「まずは私が。下準備をした甲斐がありました。」

「エリゴールか……。任せよう。」

名前を呼ばれた男は朱色に輝く刃をもった槍を高々と掲げ、闇に解けた……。

孫呉集結（後書き）

敵の正体が少しづつ分かってきましたね。
ちょっとウァサゴの出し方は無理やりでしたが、助言をする役よして出したかったので結果的にはおkですよね……？

そんなことはねぇよ！と思う方は石を投げ内でくれるとありがたいです。

見て下さっているからありがとうございます。感想、お気に入り登録などじゃんじゃんください。

第一の刺客エリゴール（前書き）

作者は大変なことに気づいてしまいました………。

呉の皆とは仲良くしているものの……。

まだ！誰にも！！！！フラグ！！！建ててない！！！！！！！！！

と、とりあえず、どうぞ……。

第一の刺客エリゴール

朝起きて、頭を抑えながら考えたこと……。

なぜ、自分はウァサゴに警戒心を持たなかったのだろうか??

敵意などというものが感じられなかった……というのもあるのだが……。

なぜか、こう……懐かしい気持ちになって……。

ダメだ、完璧に二日酔いで頭が痛い……。考えるのをやめよう……。薬薬……。

「ふぅ、大分楽になった。さてさて、どうしようかな……。」

とりあえず、朝食か……。

朝食の場にはふさわしくない剣幕の皆がいた……。

「え～と、これは一体……？」「黄巾党の輩が、こちらへ迫ってきているようじゃ。」

昨日あれだけ呑んだのによく元気ですね……。

「なるほふぉ、ほへへふょうふぉふふぁ……。」「ちゃんと食べてから話せ。」

と冷たい孫権様……。

「ゴクン、それで朝食が軍議の場になっているんですね。」

「ええ、そうよ。どうしようかな～って話してたんだけど……。」

「とりあえず、敵の位置は？偵察は出したんですか？」

「ええ、出したの。でも、帰ってこなかったのよ。」

偵察隊が戻ってこない？……よっぽど深刻な状況らしい……。

「では、俺が行きましょうか？」「は？」「いや、だから、俺が行ってきましょうか？」

「大丈夫なの？」「ええ、これでも忍びの端くれですから……。」

「忍び？」「ええ、諜報、暗殺に長けたものの総称です。」「……どうする？冥琳？」

黒髪長髪めがねの女性が周瑜さんです。

「少々危険だと思うが……。」「大丈夫ですよ、どうせなら俺一人で潰しちゃいますよ？」

もちろん冗談。冗談ですよ？

「そこまで言うなら任せよう。」「御衣。」

丁寧に一礼してから朝食を終えて、準備をする……。

「うわー懐かしいな～。この装束……。」

アキバで歩いたらこすぷれ？って思われるくらい映画に出てくる忍びそっくりの装束。だけど、ただの装束ではない……。

そう、この装束こそが伝説の忍び風魔小太郎を生み出したのだ。忍びとは常に人々のなかにいるのである。人の中に紛れ込み、巧みに情報を得て、必要であれば相手を殺す。

風魔小太郎の姿は誰も見たことがないとされているが、実際は違う。みてはいる。だが、それを風魔小太郎として認識していないだけなのだ。

この装束の話に戻るけど……。この装束はその地域にあった服装に自ら形を変える。今回の場合であれば、黄色を基本とした服装になる。これで、敵陣に忍び込み、さも当然のように陣を歩き回って情報収集及び工作をするのだ。

コンコン……「どうぞ～。」

「黄巾党！！？こんなところに！」

といって切り掛かってくる周瑜様。

「ストップストップ！！！待ってください！！俺ですよ！俺！！！」

「む……？戯勲……？」「そうですよ。潜入できるように変装していただけですって。」

「そもそも、中に黄巾党がいたらどうぞ～なんていわないでしょう？」

「む、確かに。すまなかった。」

いくら、変装がうまいからってそこまで考えない周瑜様ではない……。

「もしかして、最近まともに寝ていなかったりしてませんか？」

「……分かるのか？」「ええ、忍びは普段薬を営んでいるもので

すからそれなりに……。」

しばらく寝ていないのだろう。目を凝らさないと見えないくらいのうすい隈が出来ていた。それに本人も自覚ないだろうが脈が早まっているように見える。

「まぁ、とりあえず。このお茶を飲んでください。」

普通の紅茶だけど。リラックス効果があるからね……。よく効くんですよ？これ。

「変わったお茶だな……。だが、不思議と落ち着く。」「ゆっくりと休んでくださいね。」

「周瑜様はこの国に絶対必要な人間です。周瑜様は俺にとっても大事に人なのです。」

「な！？だ、大事！！！？？？／／／」

はい、これ以上文官の仕事が増えてもらったら困りますし……。なぜ、顔が赤く……？

「へ、へんなことを言うな！さっさと行け！！／／／」「わ、分かりました……。」

自分の部屋から追い出されてしまった……。まぁ、いいか。さっさといこう。

黄巾党天幕……

かなり強い奴か。どうやらかなり腕の立つ人がいるらしい……。これは報告しておかないとな……。そろそろ引き上げよう……。ん？あれはなんだ……？

天幕に群がる人だかり。何かあるのだろうか……。

「すみません。これは何ですか？」「……ん？何だ、知らないのか？」

天幕の中には可愛らしい少女たちの絵やポスターなどが張られて

いる。

「これは黄巾党の首領三姉妹の張角、張宝、張梁の小物などを販売しているんだ。」

「貴方は興味ないんですか？」「私はこれでも女だ。……そういう君は？」

「そういう目的で入ったわけではないので……。」「そうか！君も私と同じか！！」

腕が……腕がもげる……。

「お、落ち着いてください。」

手をとられて思い切りぶんぶんさせられたらもげますよ？

「む、すまない。私の名前は太史慈。主は？」「俺は志悪戯勲と申します。戯勲と呼んでください。」

「ところで、太史慈さんは何で黄巾党に？」「腐敗しきった朝廷をたたきなおすためだ！！！」

「戯勲もそうではないのか？」「俺ですか？……実は俺もそうなんです。」

「そうか！では、今夜は私と飲明かそう！」「え！？」

今日だって二日酔いで起きたのに……。また酒飲むんですか？話し合わせるんじゃなかった。

「ところで、君は……どこの所属かな？」「うぇ！？」

これは忍びでも答えることが出来ない。不穏な空気な嗅ぎ付けて周りの兵士が集まってくる。

「どうした？答えられないのか？」「降参ですよ。俺は呉の密偵です。」

「そうか、大人しくしてもらえないだろうか？」「それは出来ませんね……。」

周りから剣を突きつけられている……。だけど……。

「残念だ。君とは一度ゆっくり話したかったのに……。」「そう簡単にはつかまりません！」

ルークを大剣に変形。とりあえず斬りとばす！

「何！？どこから！！？」「でやぁッ！！！」

天幕の外に出て広い場所へ……。でも結局は包囲された。

「さすがに数が多いな……。」「全員下がれ！！私が相手をする……。」

まさかとは思ったけど……本当に？

「貴方が強い人ですか……。雰囲気からそうではないかと思っていましたが……。」

「さぁ、構えろ！一騎打ちだ。」

名が細い鉄鞭を両手に持って襲い掛かってくる。

「目には目を双鞭には双剣を！！！」

右からの切り下ろしを左で防御、そのまま流して体制を崩すのが目的だったけど……。

「フン！！！」

踏ん張って左のほうを横に振ってくる。

「グ！」「どうしたどうした！そんなものか！！！？」

「いえいえ、これからです！！」

右で突いて、態勢を低く、左で足を狙って横薙ぎ。

「早い！」

跳んでかわす。すかさず、着地したところに攻撃を仕掛ける。縦、

横、横、縦、縦、縦。

「く！さっきまでとはまるで違う！」

「終わりにしますよ？」瞬妓・影縛

影が相手の足をつかみ、一瞬だけ動きを止める。すかさず背後に回り、手刀で気絶させる。

「さぁ！貴方たちの大将は倒れました！降参するなら今です！」

だが、周りが剣を下げる気配がない……。

「見事だ。戯勲よ。」「誰だ！？」

また、あの感じ。ウァサゴと同じ感覚。懐かしい。落ち着く。敵なのに。

「私の名前はエリゴール。六十の騎士を指揮する公爵だ。」

「ソロモン七十二柱。」

汗が止まらない。それほどまでに強い相手ということ。つまりは危険。戦場に慣れ親しんだオーラを感じる。

「お前の命を貰うぞ。」「ちッ！連戦とは……。」

エリゴールから放たれる槍の一撃。すばやい突きの後に繰り出される横薙ぎ、そしてそのままの勢いで突き。

「強い……。とてつもなく強い……。」「さすがは……の息子。」

「セイッ！！」

低い声と共に放たれた渾身の突き。それはルークを砕いた。

「な！？」「これで獲物はなくなったな。せめて楽にいかせてやる。」

まだだ、まだ武器は残ってる。鎌がある。

油断したのか頭めがけて遅い突きを放ってくる。

「いまだ！」「何ッ！！？」

鎌で腹を一閃。血や、傷などは出来ていなかったが、確実に致命傷を与えたようだ。

「ぐぅぅ！！なぜ、その鎌を……。地獄に戻されてしまう……。フフフ、だが、楽しいひと時であった。その卑怯さ。あいつとそっくりだ……。」

最後のほうは聞き取れなかったが、勝ったようだ。

「うわぁ！化けの物がやられた！！！」「太史慈もやられちまったのに！もうダメだ！！！！」

逃げ惑う敵。今度こそ、大将を討ったようだ。

「だが、これで終わりではない。……お前にこれをやろう。私は負けたときには己の獲物を渡すと決めていたのだ。このやりをお前に。かつて豪傑から勝ち取ったものだ。名を……ガエボルグ」

槍だけ残して露散した。

「終わった。結局、一人で潰しちゃった。」

あれは冗談だったのに……。

「う～ん、帰ろうかな……。」「う～。」

傍でうねり声がしたので思い出した。太史慈さんを気絶させたままだった。

「お～い、起きてください？」「う～……ハッ！！！！！」

目が覚めたようですね。

「あれ！？ほかの連中は！？？」「皆逃げたよ。」

「殺さないのか？」「元々、そのために来たわけではないから。どこへでも行って貰ってかまいません。」

「そうか……。なら……。私を連れて行ってくれないか？」「……なんで？」

「君にほれた。」「へ？」「何度も言わせるな。君にほれたんだ。」

「君の武、すばらしかった。君のような人が使える人に会えば、朝廷の腐敗も何とかできるかも知れない。だから、私を連れてってくれ。」

女性の頼みごとを断りにくい志悪戯勲。それに彼女は有能だから、役に立つかもしれない。
黄巾党の情報も手に入るし……。（必死にいいわけ考えてるだけ。）

「わ、分かりました。そこまで熱心に言うのなら……。」「そうか！ありがとう！！」

といって、思いっきり抱きついてくる太史慈。とりあえず、帰ろう。

城に戻った後、女性が一人増えているということで周りから質問攻めにされた。そして、翌日。

なぜか！周瑜さんのほうから文官の仕事が大量に回ってきた。

第一の刺客エリゴール（後書き）

ぐは！！己の文才のなさに挫折！！！

こんな作者ですが、温かい目で見てください。

オリキャラ登場ですね。そして、刺客をとりあえず、倒して
本職の槍をゲッツ！！！！そして、次回。槍で無双する主人公！！！

の前に、部屋から出て行った後の周瑜様を書きたいと思います。

悪戯に恋注意報！！その１（前書き）

では、文才の無い私めが書く初の恋愛編です。

悪戯に恋注意報！！その１

「へ、変なことを言うな！さっさと行け！／／／」

戯勲にそういうと、彼は逃げるように出て行った……。ハァ……。

大事な人か……。

ハッ！！わ、私は何を考えているのだ！！！

とりあえず、お茶を……。ズズッ！

ゆっくり休んでいってくださいね？

……ニヤニヤ（↑いやらしくないよ。）い、いかんいか

ん……。

さっきからなんだというんだ……。戯勲のことを考えると胸が苦しくなって、心臓も早くなる……。

これは一体……。（それは恋ですよ……。）なんなのだろうか？（だから恋だって！！！）

恋……というものなのか？（そうですよ！恋ですって！！あ、僕の声は聞こえませんかｗｗ）

わ、わわわ私は……。彼が好きなのだろうか……。

きっと、好きなんだろう……。

フッ……。仕事に戻るか……。

夜帰ってきた彼の報告には首謀者の名前と顔という大きな土産と一人でこちらに向かっていた奴らを倒してしまったらしい。それとは別に……、女性が一緒にいた。

明日、こっそりと仕事を増やしてやろう……。

悪戯に恋注意報！！その１（後書き）

ということですね。あ、ちなみに途中のは僕ですよ～？
なんとなく出してみたかったんです。
ちょっと中途半端かな～？とは思いますが、そんなことを言われたら
「人を好きになるのに理由なんて要らないじゃないか！！！」
という開き直りがあります。

感想、評価をバンバン！送ってください！！！！

オリキャラ設定？（前書き）

更新が出来ずにすみません！家の事情なので短くかける詳細にさせていただきます。

オリキャラ設定？

志悪　戯訓　（しあく　ぎくん）

代々犬神を身に宿し、従える家に生まれた長男。兄弟はいない。母親は既に他界。

その際に犬神を母から受け継いだ。父は風魔党の党首。祖父は先代党首。

忍術なら完璧（しかし、身体能力を強化してもらえなければ使えるようにならなかった。）

だけど、武術は槍以外は全て強化して貰った身体能力頼み。

ちなみに常人の十倍。なのでこの世界最強の呂布の約二倍。

ロキから貰った能力、武器

強化……常人の十倍の身体能力。

スクラッド……頭の中でどういったものが欲しいのか、イメージしながら手を突っ込むとその目的に応じた最良のものを選んでくれる。ロシア語で倉庫と言う意味。だが、神の国でも存在しないものはあるので、存在しないものは出せない（死者をよみがえらせる薬

など……。）
また、神様が使う武器なども出せない様子。

ルーク……ウルフのルとスネークのークでルーク。変幻自在の武器。どんな武器にもなる。
だけど、ルークという一つのものに定められた能力を変化させることはできないので集中的に使いたいものがあればそれをこの世界で作ったほうがよい。神々を苦しめたフェンリルとヨルムンガンドの魂が
宿る。
エリゴールとの戦いにより砕かれてしまったが、手裏剣やクナイなどの小物にはなる。

グレイプニル……かつてラグナロクまでフェンリルを天に縛り付けていた魔法の紐。今は戯勲が付けている首飾り。抑えきれない犬神の力を抑えるために与えられた。

最高位死神の鎌……死神の鎌自体に名前はなく、階級によって定められた鎌が与えられる。この鎌は最も位の高い死神が持つ鎌。人を殺すための武器ではなく、悪魔などを殺すための武器だった。

元々本人が持つ力（犬神）について

本来、犬神は一つだったのだが彼のうちにある強力な負の感情が犬神の力を一部奪い取った。負の感情は精神を乗っ取ることもできたが、それはもう一方の犬神の巧みな力により均衡を保っている。

グレイプニルの力により、腕だけならば犬神を具現化できる。

正式な儀式を行えば、犬神の力を完全に操ることが出来る。しかし近頃、均衡の崩れが見られる。
口調などもその影響。

ガエボルグ……英雄の使っていた槍、これと似たものがクランの番犬の二つ名をもつ英雄が持っている。朱色をしており、先が二つに分かれて真ん中に空間が出来ている。刃を見つめると今まで斬られたものたちの魂が見える。斬れば斬るほど切れ味が良くなる。

姓太史　名慈　字子義

朝廷の腐敗をなくすために黄巾党に参加したらしい。

武器……双鞭といって硬い鉄の棒のようなものを両手に持つ。名前を狼鞭・虎鞭というらしい。

ショートの茶髪。目も茶色。意外と冷静、でもはしゃぐ時には思い切りはしゃぐ。後によく雪蓮と起こられてる姿が見られる。

強さは甘寧＜太史慈＜黄蓋な感じ。

オリキャラ設定？（後書き）

短い設定紹介しか出来ずにすみません。
主人公のところに補足をしておきましたのでよろしくお願いします。

悪戯無双（前書き）

ちょいちょいとしか更新できませんがよろしくお願いします。

悪戯無双

「せい！とりゃぁ！！！」

朝から槍術と忍術の鍛錬を行なう僕、志悪戯勲。

「この槍のフィット感がいいなぁ……。死んだ人の魂が見えなければいいんだけど……。」

あと、この切れ味を……。どうやら持ち主が変わると武器の切れ味も初期化されてしまうらしい。だったらなんで魂は初期化されないんだろう……。適当に何か切ればいいらしいが、人を斬る方が断然上がるらしい……。なぜそんなことを知ってるかって？夢にロキが出てきましてね、教えてくれたんです。儀式はもうすぐできるようです。

「今の所人に傷を負わせるのが精一杯か。まぁ、突き刺せばいいかな……。」

「戯勲？」と不意に声の聞こえたほうを振り返ると孫権様がこちらを見ていました。甘寧さんが一緒にいるところをみるとこれから鍛錬のようです。

「こんにちは、孫権様。これから鍛錬ですか？」「ああ……。」

邪魔しては悪いですね。後は街でも散策して時間を潰そうかな……。

「そうですか、では……。」「気を使わなくていい。お前もどうだ？」

案外優しいんですね。孫権様。なんか自分で壁作ってる感じがあったから……。

「では、ご一緒させてもらいます。」

しばらくたって……。

「結構長い時間鍛錬するんですね。」「ああ、今日は鍛錬の日だからな……。」

姉妹とは違ってしっかりしてるんですね。あ、しっかりしてな

いからしっかりしてるのか。

「ところで、孫権様はなぜ自分から壁を作っているのですか？」

「壁……か。いずれは呉の将来を担うからだ。」「王になるからですか？」「そうだ……。」

「ん～。なんとなく間違ってる気がしますね……。」「何？」

剣を交えながらの会話。ちょっと、力が強くなってる……。

「ッと！怒らないでくださいよ。」「どういうことだ……？」

「そうですねぇ。王というものには色々ありますが……。孫権様が王になる頃、乱世は終わっていると思います。そういうときに求められる王とはなんでしょうか？」

「威厳があり、国を統治できるだけの信頼のある王だ。」

「正解ですが、不正解ですね。もちろんそれも大切ですが、信頼とは誰からの信頼ですか？」

「家臣や民草のだ。」「では、求めているのはどういう信頼ですか？」

「……絶対的な信頼だ。」「それは乱世で必要なものではありますが、平和な世で必要なものではないと思います。」

「貴方と、雪蓮様の差は何でしょう？今、民や家臣にどちらが王にふさわしいか聞いてみましょうか？」

「しっかり者の貴方と、しっかり者ではない雪蓮様。」

「……当然、姉様のほうだ。」

良い姉や出来る兄弟、身分のいい家に生まれれば重圧にさいなまれることは当たり前だ。その重圧に立ち向かうことはすばらしいと思う。だけど、もっと肩の力を抜いてもいいと思う……。やり方も変えたほうがいいかもしれない。

「僕知ってるんですよ。そういう重圧に耐え切れなくて潰れた人。その人は名家の次期党首で今の貴方みたいに壁を作って、他人を寄せ付けないようにしていた。他人にお前は自分とは違うのだと、そういうことを思わせるためでしょうね。」

剣戟は相変わらず変わらない。相手も手を緩めない。

「完璧な人でしたね、うまく家を切り盛りしていましたから。……でもね、たった一つの間違いでその人は堕ちてしまったんです。ちょっとした間違いでその人は家のものから蔑まれました。遂にその人は命を絶ってしまったんです。」

「信頼とはなんでしょうか？完璧な頃の彼に寄せられていた信頼は一瞬でなくなりました。」

「ですが、雪蓮様が間違いを犯しているとは言いませんが、一度の間違いであの人は見捨てられるような信頼を持っているのでしょうか？」

「まぁ、ちょっとしたお節介だと思ってください。孫権様にそんな悲しい人になって欲しくないんです。信頼を簡単に裏切られてしまう人でも慕う人は山ほどいるんですから……。」

あれは悲しかったなぁ……。

「戯勲、ここにいたのか。すまないが少し仕事を頼まれてくれ。」「了解です。それでは。

仕事を手伝うために僕は冥琳さんとその場を去った。

悪戯無双（後書き）

すみません、時間が無いのでここまでにさせてください。
長い目で見てくれることを願います。

第七部　群雄結集！そして、終着へ……前編（前書き）

何部かをつけるようにしてみました。タイトルに統一感を生ませたいと思います。

それでは……

※いまさらですが作者に原作知識はありません。もし、いやならお戻りください。兵の数、キャラの性格などもおかしいかもしれません。

第七部　群雄結集！そして、終着へ……前編

名だたる群雄達は遂に黄巾党に本腰を入れるため、現在集結している。

一番乗りは官軍・何進。その次に曹操。続いて我らが呉。続いて袁紹・袁術。

最後に注目を集めている、天の御使いを頂点とした義勇軍。

「天の御使いですか～。僕はそういう自覚無いんですけどね。」

「戯勲くらい格好良かったらいいけど。」「僕はイケメンじゃありませんよ。」

「イケメン？」「カッコイイ男性の方です。」「なるほど。」

「みたいのは山々なんですが、今回は軍議に出席できないんですよ。偵察に行きますから。」

「冥琳に頼まれて？」「そうですよ。雪蓮様、くれぐれも無礼の無いように。では……。」

「風みたいにふらふら～っと消えるのね……。」

特製天幕内

ここはありとあらゆる変装グッズが置いてある。僕専用の天幕。必要なものから必要じゃないものまでなんでもござれ。

「うぇ～っと。あれとこれとあれと……。このうちわはいるのだろうか……。」

三人の可愛らしい顔の描かれたうちわ。太史慈と戦ったときの戦利品だ。

「いらないか……。あれとこれとそれと……。」

着替え中……着替え中……着替えｔｙ

「すみませ～ん、軍議ってどこでやってるんです、か……？」

「うぇ！？」

これも神の悪戯か……ロキーーーーー！！！！！！

「いやああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

……

「申し訳ない、まさか、人が入ってくるとは思わず……。」「い、いえ。」

よかった～。下の方を先に着替えて置いてよかった～。

「僕は志悪戯勲。君は……？」「私は劉備玄徳です！」

これが……。こんなのほほんとした人が……？ま、まぁ、人徳のある人だからこんな感じかもしれない。

「失礼、仕事があるので……。ちなみに天幕はあそこです。」「ありがとうございます。」

「それでは……。」「え、あ……。消えちゃった。」

……

「時間を使ってしまいました……。口調が……。益々硬くなっています。」

困った、早く儀式をしたい……。

「あれですね……。どうやって潜入しましょうか……。」

気のせいですかね……。中央の天幕の空気がよどんでいる気がする。

「いやな予感がする。まだ潜入していませんが攻め方は兵糧攻めで決定ですね。」

と思った次の瞬間……。

ウォォオォォオオォォ！！！！！！

「な、なんですか……？あれは……」

金色の甲冑。たしか……袁紹……。

その頃……

「オーッホッホッホ！華麗に突撃よ！！」

高笑いしているドリルヘアが袁紹。

「やっぱやばいよ！麗羽様～！」「勝手に始めちゃったらだめですよ！」

その他二名。

「黙りなさい！勝てばいいのよ勝てば！相手は所詮農民上がり！」

そして戯勲にもどる。

「……なんなんだでしょう。あれ……。」

あれではただ無策に命を投げ出しているようなもの。もし罠があったら……。

「思った傍から……。でもあれは罠……？」

地に浮かぶ魔法陣。ここは場所が高いのでよく見える。そして、魔方陣が光った瞬間……

その場にいた兵士が全て消えてもとの5分の1になってしまった。

そして、消えたものの変わりに出てきたのは……。

三つの頭を持つ地獄の番犬だった……。

第七部　群雄結集！そして、終着へ……前編（後書き）

「まさか、こちらの兵士を生贄に呼び寄せるとは……。偵察なんて悠長なことを言っている場合ではありませんね。撤退するように忠告した後、足止めして態勢を整えましょう……。」

主人公に迫る次の刺客。後二つに分ける予定です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5863n/

恋姫†無双　神の悪戯

2011年10月7日22時29分発行